シリーズ6

地域の目

「泡盛酔夢譚」

琉球放送　報道企画部長
（沖縄県産酒類振興・消費拡大懇話会　委員）
比嘉京子
（ひが・けいこ）

幼い頃の記憶に残る物として「泡盛」の強烈な香り、縁側に響く三線の音に心地よい夜風があります。私の原風景です。

母方の祖父の家で週末を過すたびに、食後の晩酌の席によく付き合いました。一日の畑仕事で疲れた体を癒す泡盛は祖父にとって格別な物であったのでしょう。泡盛を囲む席にはいつのまにか隣近所の人達が加わる事もしばしばで、祖父は、ほろ酔いになると三線を持ち出しては自己流の演奏を披露していました。

ツーンと鼻をつくような泡盛の香りはかなり強烈でしたが、三線の音や庭から流れてくる風、大人たちの話し声、すべてを包み込んでいたように思います。

あれから数十年がたち私が泡盛を好んで飲み始めた年代には、祖父の泡盛の香りに出会う機会は少なくなりました。それが物足りないという指摘も一部にはあるようですが、製造技術の改良などで味もまろやかになり酒質が向上したのは事実ですし、女性を含め泡盛ファンの裾野を広げているのだと思います。

普段、なにげなく親しんでいた「泡盛」ですが、最近、さらにその奥深い世界に注目させられる状況が生まれた。谷本内閣府大臣政務官が主催する「県産酒類振興・消費拡大懇話会」の委員に任命されたのです。理由はお酒を愛する消費者の代表という事でしたが、私以外は泡盛や食文化の研究者など錚々たるメンバーです。食文化などの視点から沖縄産の酒（泡盛・ビール等）のさらなる消費拡大に向けて意見を求められるのですが、こだわりを持つ皆さんの意見を聞いているだけで、勉強になり沖縄が世界に誇れる宝物をもっている事をあらためて認識させられました。

泡盛の古酒が高い評価を受けている事もふまえ、懇話会では名実ともに泡盛を世界に通用するブランドとして確立するための、アイディアが出されています。水割りやカクテルなど多様な味わい方の提唱。女性やシニア層を今後の有望な市場と想定し、泡盛の「健康効果」などイメージの確立。さらにワインのソムリエのような泡盛の解説者の育成などが提案されています。解説者については、泡盛マイスターが誕生しており今後の育成に期待したいところです。

泡盛は全国的な認知度を上げてきており、本土に根強いファンもつかんでいますが、消費拡大にはさらに安定供給の面で課題もあります。地域の味を育ててきた47酒造所それぞれの努力も必要ですが、行政的支援、さらに観光産業など他の関連産業との連携など、トータルコーディネートを担う機関や仕組みづくりも求められます。

５００年余の歴史がある泡盛は、琉球王国の時代に中国をはじめ東南アジア諸国と貿易をさかんに行う中で、この島にもたらされました。中国の冊封使が残した文献には「泡盛はシャムから来たもので、造り方は中国と同じ」だと記されています。諸外国の物品、技術、文化を上手に取り入れながら独自の物を生み出してきた先人の知恵が、名酒「泡盛」を育んできたのです。

こうした歴史的背景に加え、泡盛の最大の魅力は、「育てる酒」である事だと思います。子供の誕生や、結婚・新築・就職など人生の節目に泡盛を仕入れ、気にいった甕でじっくりと時間をかけて育てる。最初は各酒造所の酒がそのうちに「○○家」の古酒として受け継がれるというロマンを感じます。

今夜も、杯を重ねながら心踊る会話とともに、この島から泡盛が世界に広がる事を夢みています。